



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	葉を求めて : 「右の耳に水」 : フィールドのざわめき
Author(s)	眞崎, 睦子
Citation	Interface humanities : 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」ニューズレター, 3, 36-37
Issue Date	2004-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32592
Type	article
File Information	masaki.pdf



「栗（しおり）」の研究を始めてから十年が経とうとしている。

栗の原義―もともとは枝折と記し、旅人が山道などで木の枝を手折り、後進が迷わぬように道しるべとしたもの―を知ったときの感動、これまで分析を加えてきた「栗」の一葉一葉を手にしたときの喜びは今もこの手のうちに温かい。資料収集の作業そのものや、その過程での旅や出会いなどをいつもどこかで楽しんでおり、これが世に出て他の皆様のお目に触れることになろうとは想像すらしたことがなかった。大阪大学大学院言語文化研究科という「場」で少しづつ書き綴った論文の寄せ集めが、『渡米移民の教育―栗で読む日本人移民社会』のタイトルで出版されたのである。拙著で分析を加えた「栗」とは、百年ほど前にアメリカを目指して海を渡った方々の間に流布した一枚刷りのリーフレットなどである。未知の世界への移動を経験し、異文化の壁を体感した人々は、想い想いの情報を「栗」というメディアを通して後進のものに示した。分厚い書物に触れる習慣のないものでも「栗」であれば柳行李や風呂敷包みに忍ばせられる。ときには長い船上でのお供役も果たしたはずだ。いわば、「栗」は最も小さな「紙上の学校」だったのだ。例えば、和菓子箱の箱に入っているような栗、『渡米婦人心得』から「船上の心得」の一節。

細帯の時はず必ず被布を被ること
（下着・寝巻きのような格好のときは必ず上着を着てね）
理由なしに偷笑せぬこと
特別親切にしてくれる男子に警戒し身に隙を見せぬこと

（ ）内は横田訳

伊万里生まれの祖母は、福岡の嫁ぎ先が海運業だったことから、ある時期から福江島の港近くに暮らすことになり、祖父が船の事故で他界した後も五島の文化のうちに五島弁で生活していた。長崎の町の真ん中の子供だった私は学校が休みになると、まるで船の積荷が何かのように大波止（長崎市、出島の隣です）の船着場で福江島に向かう誰かに簡単に預けられては、この祖母を訪ねた。勝手知ったる二等船室に走り、積み上げられた中から自身の毛布と洗面器（船酔いに備えて）を確保し、その日の朝に市内のベーカーリーで焼かれたパン（当時はお土産として喜ばれた）、宿題と着替えを荷置棚に放り込む。それさえすめば、知らない大人や子供と「今日は風でよかった」などと話したり、甲板に出ては航行に沿って跳ね急ぐ飛魚の群れを眺めたりしながら福江港までの四時間半を過ごすのだ。船を降りた後の、陸の上でもしばらく体が揺れているような感覚が懐かしい。栈橋周辺で売られていた海産物の匂いは今でも鼻先によみがえる。好物のかんころ餅（さつま芋とモチ米でできた五島の名産品）を求めに祖母と連れだって歩いた海沿いの道には湿った潮風が吹いていた。そして小学生だった私を親戚が待つ大阪に連れ出し、梅田の百貨店や京都の歌舞伎へと誘ってくれたのもこの祖母だった。大阪での祖母は、いつもと変わらない地味な色の和服に包まれてはいたものの、五島では隠し持っていたような表情を、白い半襟の上にたたえていた。長崎の生家には、この祖母を介して、都会の学校の受験や商用のため、五島から、そして五島へと移動する客が絶えることがなかった。「むつちゃん、『みんなにみんな』で何かわかるね」、私は実に多くを移動する人々の言葉や指先から教わったものだ。

……などというようにことをちよつと「あとがき」に書いたので、父がほんの一時期お世話になった長崎県立五島高校に一冊送らせていただいたところ、クリスマスイヴの日に思いがけないことが起こった。お目にかかったこともない

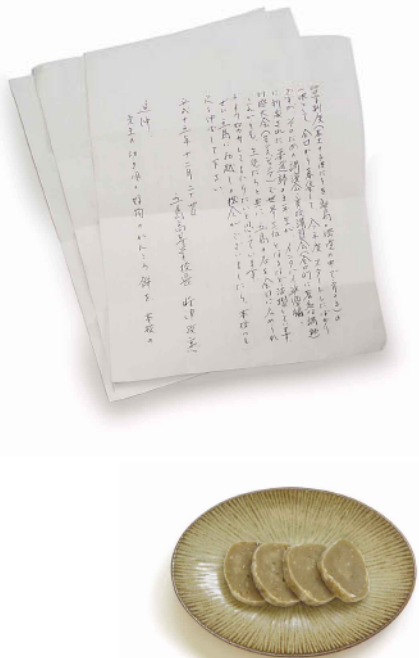
どうです？ 最近の一人旅の女性の皆さんも気をつけて。百年のときを経ても、言葉は多少変わっても、移動する人間への眼差しはそう変わらない、そして、どこかあたたい。「栗」はそれを証言するかのようになを生きる私に語り掛けてくる。

さて、この研究を始めてから十年と書いたが、実はもつと以前からその動機となるような経験があったのではないかとあれこれ思い返している。身近な人間、そして私自身が移動を重ねるうちに得たものあるいは失ったものについてである。

すでに他界した私の父は、十代の初め、初めて生まれ育った五島列島の福江島を出て大阪の親戚を訪ねる際、とうとう他の誰とも一言も言葉を交わさず、大阪駅に到着するまで立ったままで車中を過ごしたそうである。福江島から長崎市まで船で五時間以上、長崎駅から大阪駅まで列車でまる一日かかった時代である。同じ九州とはいえ長崎市は父にとって大きな町であり、目的地の大阪はさらに大規模な都会だったのである。今では想像もつかないほどの文化差が父の前に立ちちはだかっていたのだ。大阪で観た欧米の映画の話、大阪で食べたきつねうどんの話、大阪は当時の西日本の少年少女にとってそうであつたように父にとつてもまさに憧れの地であつたのだろう、後年大阪での思い出話をするときの父の目には少年の輝きがあつた。しかしこまつた席の父の言葉のどこかにいつも大阪訛りがあつたのは、その後数年を大阪で過ごすことになった以上に父の文化のスタンダードが大阪との出会いによつて生成されたからに違いない。

五島高校の校長先生から連絡があり、職員の方お手作りの「かんころ餅」を送って下さるとのことだった。受け取った「かんころ餅」には便箋三枚のお便りと何という植物だろう、七つ葉の緑が添えてあつた。それは昔、私が初めてアメリカに旅立つとき、もう一人の祖母が赤と白の水引を結んで道中のお守りにと持たせてくれたものだった。

私は、今でも大阪大学という鬱蒼とした森の中で、私のために手折られた「栗」―道しるべを探す旅を続けている。



横田睦子（よこた・むつこ）
「インターフェイスの人文学」特任教員（COE）
2002 年 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了
2000 年 第 25 回国際理解教育賞（エースジャパン賞）
著書『渡米移民の教育―栗で読む日本人移民社会』※写真右
（2003 年、大阪大学出版会）
専門は言語文化学・社会教育（移民教育、薬物教育など）